

ホームステイの英語力への効果 (II)

The Effect of Homestay Experience in the United States on the Participants' English Proficiency (II)

(1990年4月9日受理)

沼本 健二 上斗 晶代

Kenji Numoto Akiyo Joto

Key words: ホームステイ Homestay, 英語教育 English Education, 英語力 English Proficiency/Competence

Abstract

The purpose of this investigation is to reconfirm that the English ability of homestay students tends to be higher than that of non-homestay students, and that, out of the five sections of the English proficiency test, significant improvement is found in listening comprehension and knowledge of conversational expressions after the trip in the homestay student group. It is also our purpose to outline some features found in the speeches of the homestay students.

I はじめに

上斗他 (1989) は、語学研修を目的としたホームステイが、参加者の英語力にどのような効果をもたらすかを明らかにしようとした試みであった。それによると、ホームステイの前後では、聴解力と会話表現の知識において有意な向上が認められたものの、ホームステイ参加者の集団 (以下、HSG) と不参加者の集団 (以下、N-HSG) との間に、有意差を生じるまでには至っていない。しかし、参加者の学生生活や学習態度を観察していると、ホームステイの影響があることは疑いを入れないことのように思われる。

本稿では、上斗他 (1989) で報告された結果を再確認するために、調査方法・実施時期には大きな変更を加えないで、テストとアンケート調査を実施し、その結果を比較・検討する。但し、調査対象については、本学英語英文科第1学年の学生に限ることとした。その理由は、第2学年の成績上位群と下位群の差が拡大する要因が教育課程にあると思われるからである。すなわち、下位群の学生が、英語力を伸ばすのに適した「英会話Ⅱ」や「LLⅡ」などの講座を敬遠し、安易な方向に流れる傾向を見せており、テスト結果に、ホームステイ体験以外の要因が反映されるのを避けたいからである。また、学生の実態に合わせるために、「JACE T英語聴解力標準テスト」から、「JACE T英語基礎聴解力標準テスト (Basic)」に切り換え、下位群の学生の成績が調査結果に反映されるよう配慮した。

Ⅱ 目 的

本稿では、以下の項目について調べる。

- 1) 上斗他(1989)で報告された有意ある向上が再びみられるかどうか。
- 2) 成績上位群と下位群の成績の推移はどうか。
- 3) 話すことに関わる技能の習得について、H S GとN-H S Gの間に相違がみられるかどうか。

Ⅲ 方 法

調査方法は、上斗他(1989)で報告された結果と比較するために、聴解力テストを変更するに留めた。テストの種類、実施時期、実施方法の概略は次の通りである。

1 「英語力テスト」

「英語力テスト」は、下記の5分野にわたって英語力を試すために、独自に作成したものであり、聴解力の分野を除く他の分野については、日本人英語学習者が受けてきた伝統的テストと考えてよい。前年度使用したものをそのまま使用した。

1) テスト内容：聴解力26項目、会話表現の知識20項目、語法・作文20項目、語法・文法20項目、読解力20項目、計106項目。所要時間75分。

2) 実施時期：

第1回 1989年7月上旬(ホームステイ出発直前)

第2回 1989年9月中旬(帰国して約1ヶ月後)

2 「J A C E T英語基礎聴解力標準テスト(Basic)」

前年度使用した「J A C E T英語聴解力標準テスト」が、本学学生の実態に合わないため、新たに開発された「J A C E T英語基礎聴解力標準テスト(Basic)」(以下、J B L C T)を使用した。J B L C Tの特質は、聴解練習が不足しがちな学習をしてきた大学生の実態をふまえたものであること、視覚的な要素を導入していること、全問4肢選択とし信頼性を高める努力がなされていることである。

1) テスト内容：絵と写真を印刷したマークシートを使用し、解答の選択肢は音声による。

Part 1 写真や絵を見ながら、聞き取った説明文の中から内容の一致するものを選ぶ問題 10問

Part 2 質問を聞いて適切な応答文を選ぶ問題 10問

Part 3 二人の対話を聞いて、それに関する質問に答える問題 10問

Part 4 60語前後の文章の朗読を聞いて、その内容に関する質問に答える問題 10問

2) 実施時期：

第1回 5月中旬(ホームステイ出発の2ヶ月前)

第2回 11月下旬(ホームステイが終了して3ヶ月後)

本稿の調査対象は、本学英語英文科1年生のうち、上記のテストを全回受験した96名とした。H S G 33名、N-H S G 63名である。

3 アンケート調査

上斗他(1989)で使用したものに、いくつかの質問を追加して実施した。

1) 調査対象：1989年夏に実施された第6回アメリカ英語研修に参加した英語英文科学生42名

- 2) 実施時期：1989年9月と1990年1月
 3) 内容：英語力の自己評価，英語学習意欲，および学習態度等に関する質問を中心とする23項目

IV 英語力テストの結果と考察

表1は、「英語力テスト」の結果である。テスト結果は得点率で示した。

表1 英語力テスト一分野別正答率とt検定結果 (1) (数値は%)

| 分野 | 項目数 | | 第1回 7月 | | 第2回 9月 | | [9月-7月]の差 | | [HSG-N-HSG]の差 | |
|-------------|-----|------|-------------|---------------|-------------|---------------|-------------|---------------|---------------|-------|
| | | | HSG N=33 | N-HSG N=63 | HSG N=33 | N-HSG N=63 | HSG N=33 | N-HSG N=63 | 7月 | 9月 |
| 聴解力 | 26 | Mean | 52.10 | 60.26 | 56.06 | 59.34 | 3.96 | -0.92 | -8.16 | -3.28 |
| | | SD | 10.16 | 13.77 | 17.15 | 17.71 | | | | |
| 会話表現 の知識 | 20 | Mean | 50.61 | 49.68 | 56.82 | 51.50 | 6.21* | 1.82 | 0.93 | 5.32 |
| | | SD | 14.76 | 17.29 | 14.81 | 15.50 | | | | |
| 語法 作文力 | 20 | Mean | 35.76 | 36.90 | 36.52 | 37.14 | 0.76 | 0.24 | -1.14 | -0.62 |
| | | SD | 14.83 | 16.44 | 14.85 | 16.71 | | | | |
| 語法 文法力 | 20 | Mean | 32.42 | 39.13 | 36.52 | 38.41 | 4.10 | -0.69 | -6.71 | -1.89 |
| | | SD | 11.49 | 14.68 | 10.33 | 12.94 | | | | |
| 読解力 | 20 | Mean | 36.82 | 40.08 | 38.94 | 43.33 | 2.12 | 3.25 | -3.26 | -4.39 |
| | | SD | 21.21 | 20.13 | 18.45 | 19.21 | | | | |
| Total | 106 | Mean | 44.67 | 48.83 | 48.33 | 49.51 | 3.66* | 0.68 | -4.16 | -1.18 |
| | | SD | 9.43 | 12.08 | 10.44 | 13.13 | | | | |

*...P<0.05 (対応ありのt検定による)

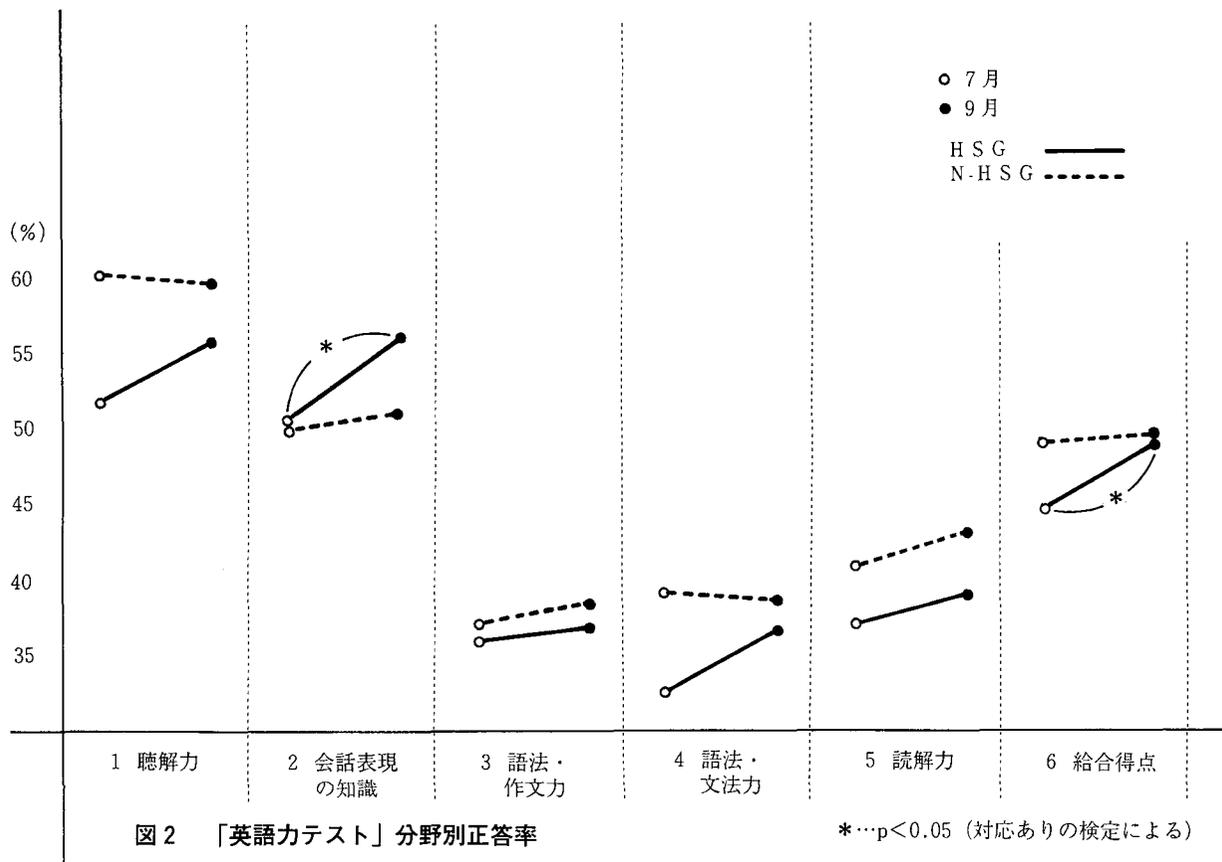
本年度の特徴は、HSGの方が全体的に得点が低いことである。従って、HSGは、第1回と第2回のテストにおいて、会話表現の知識と総合点において有意ある向上を示したものの、N-HSGとの間に有意差を生じるには至らなかった。もう一つの特徴は、上斗他(1989)に見られた、読解力の分野におけるN-HSGの有意差が消えたことである。調査対象から2年生を除いたことにより、調査対象が均一なグループになったことと関係しているといえよう。

図2は、表1に基づき、2回のテスト間における結果の推移を示したものである。表1と図2を参考にしながら、分野別に検討する。

1) 聴解力

上斗他(1989)の報告によると、HSGが10%の水準の傾向差を示しているが、1989年度のHSGは、有意差を生じてはいないものの、上昇傾向は示している。一方、N-HSGは、両年度共に横這い状態になっている。このことから、ホームステイの前後で、HSGの聴解力に望ましい効果が現れたといえよう。

聴解力の分野は二種類のテストから成る。一つは、4分30秒に及ぶ長い対話で、語り手の話に聞き手



が合の手を入れるのを聞かなければならない。言い直し、繰り返し、相槌等、続出する会話特有の表現の中から語り手の話を聞き分けるのには、普通の教室では習得できない技能が必要となろう。H S Gが、たとえ短期間とはいいいながら、自然な英語に触れたことにより何らかの聴解技能を獲得し始めたともみて差し支えない。

2) 会話表現の知識

会話表現の知識においては、N-H S Gは、2回のテスト間でほとんど差を生じなかったのに対し、H S Gは、対応のあるt検定により、5%の水準で有意に向上している。上斗他(1989)では、両グループ共に有意に向上していると報告されているが、今回は、N-H S Gの上昇傾向は見られなかった。

この結果から、H S Gにみられた向上が、直ちにホームステイによるものであると結論するのは早計であろう。たしかに、テストに用いられた表現の中には、日常生活で頻繁に用いられるものが多く、ホームステイ中に耳で確認したことがあることは否定できない。しかし、事前準備の影響も否定できない。ホームステイ参加を決めた時点から、話す力の不足は強く意識されたであろうし、従って、会話の練習にも他の分野以上の熱が込められたと考えられる。このことは、アンケート調査からも伺うことができる。参加者は、聞く力よりも話す能力の不足の方に、より強い不安を訴えているのである。ホームステイ直前まで学習が続けられるのもこの分野であり、参加者の要求が強い誘因となったことは確かである。

3) 読解力

語法・作文力, 語法・文法力と並んで, 読解力においても注目すべき向上は認められなかった。しかし, 今回は, 上斗他 (1989) の報告と違って, 両グループ共に得点が下がることはなかった。この結果は, 調査対象を絞ったことと関係しているものと思う。

4) 総合得点

総合得点率においては, 両グループ共に上昇傾向を示しているが, H S Gの方が高い上昇率を示し, 5%の水準で有意差を生じた。一方, N-H S Gはほとんど横這い状態であった。この結果は, 聴解力と会話表現の知識の二分野における上昇傾向を反映したもので, ホームステイ体験と, ホームステイ参加によって誘発された参加者の要求とによって引き出されたものである。

ホームステイ参加者に, 一般の旅行者に働くのと同じ心理が働いたことは, 十分考えられる。旅行者は, 出発前には「話せないこと」に不安を抱き, 旅行中は「聞きとれないこと」を嘆く。ホームステイ参加者も, 話す力に自信が持てないから, 会話の練習を重点的にし, 会話表現を暗記しようとする。ホームステイ中は, 聞き取れないことに辛い思いをしながら, 自然な英語に直接触れることによって, 無意識的に聞く技能を習得するのであろう。

2 「J A C E T 英語基礎聴解力標準テスト」

J B L C Tの第1回目のテストは5月中旬に実施された。入学して約1ヶ月後, 短大での学習が軌道に乗り始めた頃で, 外国人教師による英会話の授業に対する不安がようやく消えかけた頃のことである。高校時代にA E Tの指導を定期的に受けた学生もいないし, 聞き取り練習のために教室でテープを聞いたことのある学生も少ない。J B L C Tは, そのような学生の実態に合ったテストで, 受験中の学生の表情にも, 「J A C E T 英語聴解標準テスト」のときのような, 不快感は認められなかった。

表3は, 2回のテストの結果を示す。得点は, 開拓社J A C E Tテスト係から送り届けられた標準点を用いてある。第1回と第2回のテスト結果の差の検定は, 対応のある検定によって行った。2回のテスト間の相関関係は, H S Gにおいて.78, N-H S Gにおいては.71で, いずれも高い相関を示したが, H S Gの方が高かった。

表3 JACET 英語基礎聴解力標準テスト
平均点と t 検定結果

| | N | | 第1回(5月) | 第2回(11月) | [11月-5月の差] |
|---------------|----|------|---------|----------|------------|
| H S G | 33 | Mean | 42.09 | 48.27 | 6.18** |
| | | SD | 7.23 | 9.63 | 2.30 |
| N-HSG | 63 | Mean | 42.02 | 47.32 | 5.30 |
| | | SD | 7.73 | 8.60 | 0.87 |
| {HSG-N-HSG}の差 | | Mean | 0.07 | 0.95 | |

**... P<0.01 (対応のある t 検定による)

H S Gは, 2回のテスト間で6.18点, N-H S Gは5.3点上昇した。対応のある検定を行ったところ, H S Gは1%の水準で有意差が認められた。しかし, 両グループ間には有意差は生じなかった。上斗他 (1989) では, H S Gが5%で, N-H S Gが10%で, それぞれ有意に向上し, 第2回のテストでは, H S GがN-H S Gよりも10点高い得点を示し, 1%の水準で有意性が認められた。今回, N-H S Gの2回のテスト結果と, 第2回のテストのグループ間の差に有意性が認められなかったが, このことは2年生を調査対象から除外したことと関係があるものと考えられる。

J B L C Tの結果は, ホームステイ終了直後の「英語力テスト」において実証された聴解力における上昇傾向が, 3ヶ月後には有意差となって維持されていることを示している。たしかに, 両グループ共に聴解力が伸びており, このことは約半年間の短大における学習の成果と見なすべきかもしれないが, 英語に関する1年生の授業科目はほとんど必修科目であるから, H S Gの方が有意ある向上を示したこ

とについては、ホームステイ体験の効果とみるべきであろう。

3 成績上位群と下位群の成績推移

ホームステイ参加希望者が参加に迷っている段階で、英語に関する種々の分野にわたる能力・知識の不足、英語学習経験の不足が、ホームステイの参加を思い留まらせる原因になることがよくある。また、英語教師の間でも、ホームステイの英語力への効果を疑問視する傾向が、特に学力の低い学習者を対象とした場合に、強く現れる。そこで、「英語力テスト」の総合点とJBLCTの標準得点を利用し、第1回目と第2回目のテストにおける成績の推移を、HSGとN-HSGの間で比較してみることにする。図4は「英語力テスト」の、図5はJBLCTの、成績の推移を示す。グラフの値は、各成績段階に属する人数をそれぞれのグループ全体に対する百分率で表したものである。実線は第2回目の、点線は第1回目の成績を示す。従って、実線が点線よりも上に移動していることが、そのグループの成績向上を意味する。

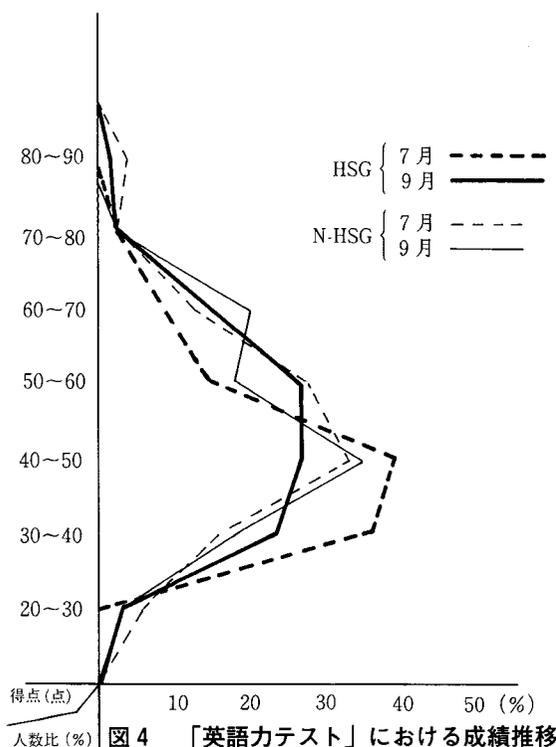


図4 「英語力テスト」における成績推移

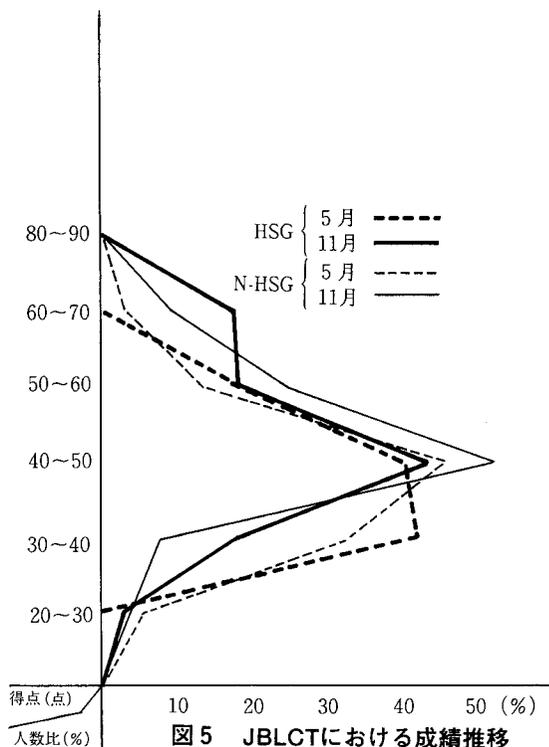


図5 JBLCTにおける成績推移

成績向上の様子は、聴解力推移を示した図5により鮮明に現れている。両グループ共に実線が上に移動していることは明白である。特に、HSGは、上位群の60~70点代の増加と、下位群の30~40点代の減少に顕著な成績向上が見られ、ホームステイ参加者全体が聴解力において向上していると結論できよう。また、図4においても、N-HSGが顕著な変化を見せていないのに対し、HSGでは、30~50点代の減少が顕著である。

以上の通り、英語を必ずしも得意としていなかったり、普通科の課程で学習していない学生の場合でも、ホームステイによって自然な英語に触れることが刺激となり、参加者それぞれが自分なりの進歩を遂げるのである。自由自在のコミュニケーションに至るには程遠いとしても、重要な第一歩を踏み出し

たことは認めてよいであろう。

4 話すことに関する技能習得の評価について

会話能力のテスト方法については、いまだ客観的な評価を得られる標準テストは開発されていないように思われる。特に、英会話を学習し始めたばかりの日本人学生の実態に合ったテストの作成は非常に難しい。

今回の調査では、前回の反省に基づき、会話能力を多角的に試すテストの作成を手掛け、試験的に実施してみたものの、テストの形式、テスト内容の難易、点数化の難しさ等、解決すべき点を多く残しており、報告に値する結果は得られていない。

しかし、指導者として学生に接していると、ホームステイ参加者と不参加者との間に明らかな相違を認めることができる。特に、成績上位者や、積極的に話そうとする学生の言葉の中に、自然な英語へと近付きつつあることを示す徴候を認めることができる。今回は、それらの幾つかを列挙するに留め、次回への橋渡しとしたい。

- ・ 母音の発音……長母音と短母音の区別や強音と弱音の区別ができる。
- ・ イントネーション……使用できる音調の型が増え、場面に応じた音調で話すことができる。ジェスチャーや表情も豊かになる。
- ・ 流暢さ……質問に対する応答が素早くなる。完全な文を話すことにこだわらず、相手の求める情報を適格に伝えることができる。日本語で考える傾向が弱まる。
- ・ 時制の使い方……現在形以外の時制を使用する頻度が増す。
- ・ 動詞の使用……動作動詞の使用語数が増す。従って、絵や写真の説明の中に、静止した状態だけでなく、人や動物の動作に関する説明が増す。
- ・ 感情・思考の表現……人について説明するとき、外見の説明のみでなく、感情や思考作用を表す言葉の使用が頻繁になる。
- ・ 経験の表現……絵や写真の説明を求められたとき、自分の経験に言及しながら説明できるようになる。

以上、テープに録音させたものを聞いたり、面接法や授業中の観察などによって収集した資料を基に簡単にまとめたが、これらの中には、単に言語的变化に留まらず、人間的・人格的な成長を思わせるものも認められる。後者は特に、客観的な評価になじみにくいという問題を持っており、今後の研究課題の中でも最も困難なものとなるであろう。

Ⅳ おわりに

今回の調査により次のことを確認できた。

- 1) 第1学年の学生に限ってみた場合でも、ホームステイ経験をした学生の方が、不参加者に比較して、聴解力と会話表現の知識において、より向上している。
- 2) ホームステイ参加者は、成績に関係なく、全体的に向上しているが、特に上位群の向上が著しい。
- 3) ホームステイの効果は、話すことに関わる技能の習得を促すだけでなく、人格的な面にも及んでいる。

今後の課題として次のような反省点を挙げておく。1)「英語力テスト」をより信頼性の高いテスト

に改善するか、他の標準テストの使用を検討すべきである。2) 会話能力の客観的な評価法の開発に必要な条件が特定できていない。3) 事前の指導も大切であるが、動機付けが強められた事後の指導により大きな可能性があるのではないか。4) アンケート調査の結果を事後の指導に役立てる方法を検討すべきではないか。5) ホームステイ以外の課外学習にも、英語習得を促す要因があるのではないか。

ホームステイは、参加者の感想文を読んだ限りでは、それまでの人生のどんな出来事よりも強い感動と衝撃を参加者に与えているようである。その体験が英語学習に効果を与えているのであれば、教師の役割はさらに意識的にその体験を英語学習の中に統合する方法を発見することであり、それにより、参加者自身にとってはもちろん、他の学習者や教師にとっても、英語学習がさらに意義あるものとなるであろう。

参考文献

- Cervantes, Raoul, Francis Noji and Mamoru Mukai. *Listening*. 東京：英潮社新社. 1986.
- Ebihara, Hiroshi and Fumio Miyahara. *English Listening Practice*. 東京：南雲堂, 1983.
- 樋口勝也, 菊池章夫. 「青年期の異文化体験 (一)」『青年心理』35号. 東京：金子書房. 1982.
- 上斗晶代, 沼本健二. 「ホームステイの英語力への効果 (I)」『中国短期大学紀要』第20号. 1989.
- 松宮つね, 対馬ユキ子, 嶺蔭裕子. 「短大生の海外研修における意識の実態について」金沢女子短期大学紀要『学葉』Vol. 30, 1988.
- 渡辺嘉子. 「中・高生のホームステイの成果」『英語教育』6月号. 東京：開隆堂. 1979.
- 日本英語教育協会編『英検2級出題分析と対策』1983.
- 日本英語教育協会編『英検3級出題分析と対策』1983.
- 日本国際連合協会編『国連英検C級問題集・1987年版』東京：講談社. 1987.
- 日本国際連合協会編『国連英検B級問題集・1987年版』東京：講談社. 1987.